
ゲリラ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲリラ

【Nコード】

N6031Q

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ナポレオンがスペインに攻め込んだ。それに狼狽したイギリス、そして抵抗するスペインの民衆が採った手段はゲリラだった。だがそれが恐ろしい惨劇をもたらすのだった。この戦争のことはゴヤの絵にも描かれています。

第一章

ゲリラ

ナポレオンの勢いは止まるところを知らなかった。

オーストリアもプロイセンも破り遂にはスペインにまで攻め込んだ。それを聞いてだった。

ナポレオンと敵対し続けるイギリスは狼狽した。慌てふためいていたと言っても過言ではない。

「このままジブラルタルまで取られてはだ」

「地中海を失う」

「それだけではないぞ」

「スペインまであの男の手に入れば」

どうなるか。想像するまでもなかった。

「只でさえ破竹の勢いだというのに」

「ネーデルラントはもう奴の手に落ちた」

「スウェーデンにはフランスの将軍が王として入るらしい」

「神聖ローマ帝国も解体された」

「プロイセンもかなり痛めつけられた」

そしてここでスペインまでというのだ。最早フランス、そしてナポレオンを抑えることなぞできないようになってしまつのではないかと危惧しだしたのだ。

それでだ。彼等はあることに目をつけたのだった。

「そつえばスペインでは保守派が強かったな」

「そつだ、カトリックがな」

「ナポレオンはジャコバンの男だな」

「ローマ教会とは和解したが基本的に仲が悪い」

「となるのだ」

その彼等を支援してナポレオンに対抗しようと考えたのである。それによつてだった。

彼等はすぐにその保守派やナポレオンに敵対する勢力の援助をはじめた。制海権が彼等の手にあるのを利用してイギリスからスペインの港に物資を次々と運び込んだ。彼等に武器や弾薬を手渡したのである。

その指揮にあたっている一人の将校がいた。赤いイギリス軍の軍服がよく似合っている。爽やかで落ち着いた顔は軍人というよりは聖職者のものだ。見事なブロンドに栗色の目の若い少尉だった。

コーネル・オーグル。彼は今スペインのその保守派に武器を渡していた。そのうえで彼等に対してスペイン語でこう話すのだった。

「それではです」

「はい」

「フランスに対してですね」

「思う存分戦って下さい」

「こう彼等に話す。

「御願いますね」

「わかっていきます。それではです」

「フランス軍を倒してそうして」

「スペインを取り戻します」

「そして我がイギリスは」

オーグルの言葉は切実なものだった。そこには曇ったものはなかった。

「貴方達を最後の最後まで援助しますので」

「はい、それではです」

「これから武器と弾薬を御願います」

ゲリラの指導者達もこう返す。

「その二つがあれば幾らでも戦えます」

「例え何があるうとも」

「しかし。貴方達は」

「ここであった。オーグルは話すのだった。

「戦場で戦われるのではないですね」

「はい、そうです」

「それはしません」

「私達はです」

彼等もそのことを否定した。

「戦場ではフランス軍には勝てませんから」

「彼等は戦場では無敵です」

「ですから村や町で、です」

「彼等に襲い掛かります」

「戦場で戦われない」

このことがだ。オーグルにとってはわからないものだった。それでいぶかしむ顔になってだ。そうして彼等に問うのであった。

「そうした戦いもあるのですか」

「私達も考えました」

「戦場では勝てないからです」

「ですから村や町で」

「彼等に攻撃を仕掛けます」

「それで戦争になるのですか」

まだわからないオーグルだった。

「そうした戦争が成り立ちますか」

生粋の軍人である彼にとつては戦場以外で戦うことは考えられなかった。だがそれでもゲリラ達に武器と弾薬を渡した。するとだつた。

彼等はそれを使いだ。町に詰めていたり村を歩いているフランス軍に対して横から、そして後ろから攻撃を仕掛けた。そして攻撃を仕掛ければ地の利を活かしてすぐに消える。そうしたことを繰り返したのだ。

第二章

フランス軍はそのゲリラにより次々と損害を出してきた。これにはナポレオンも驚きを隠せなかった。

パリにおいてだ。彼は將軍達に言うのだった。

「スペインはどうなっているのだ」

「はい、兵は送っているのですが」

「それでも。戦場に敵はいません」

「町や村にいて」

「敵兵はいないのだな」

ナポレオンはいぶかしむ顔でまた問うた。

「そして軍服を着ていない者がか」

「兵達を攻撃してきます」

「何処からかです」

「攻撃をしてくるのです」

「あれはまさにです」

「小さな戦争です。即ち」

「ゲリラです」

この名前が出たのだった。

「兵士ではありません」

「ゲリラです」

「何ということだ」

ナポレオンはその玉座から立ち上がらなければかりだった。明らかに狼狽しながらだ。そうしてそのうえでこう言うのであった。

「こうなってはだ」

「はい、どうされますか」

「スペインは」

「兵を増派する」

まずはこう決めたのだった。

「そしてだ」

「そして次は」

「どうされますか」

「ゲリラと見たら容赦するな」

これが肝心であった。彼が下した命令の中でだ。

「ゲリラは男だけではないな」

「はい、女もいます」

「そして年寄りも子供もです」

「どの者がそれなのか全くわかりません」

「ではだ。怪しい者は誰でもだ」

ナポレオンは怒ってさえた。己の、そしてフランスの誇りを傷つけられたと感じてだ。だからこそ怒りそして命じたのである。

「殺せ、いいな」

「はい、わかりました」

「それでは」

こうしてだった。ゲリラと見れば誰であろうと殺すことになった。

そしてナポレオンのこの命令は下され現地であるスペインではだ。

「陛下のご命令が出たな」

「よし、それならだ」

「少しでも怪しければそれでだ」

「片っ端から殺してやる」

突如として何処からともなく撃たれる恐怖とその敵に対する憎しみに満ちていた彼等はだ。ナポレオンが命じたのをいいことにしてだ。それよりもさらに惨たらしく動くことになった。

そしてだ。彼等はだった。

ゲリラと思われる者は片っ端から捕え実際に殺していった。スペイン中の町や村で人々が虐殺され見せしめとしてその骸が晒された。首や腕、胴が木にかけられ惨殺された骸があった。首を締められた者、切り刻まれた者。フランス軍だけでなくゲリラ達もスペインの正規軍達もその虐殺を行った。

敵味方入り混じってだった。スペイン中が血生臭い状況にあった。イギリス軍は当然スペインについて彼等と共に戦った。その中にはオーグルもいた。

駐屯地に指定された場に向かう途中にだ。彼は木に晒されている骸を見た。

裸にされ局部を切り取られ片目に尖った木が突き刺さり縛り首にされている。舌をだらりと伸ばし血泥と糞尿を垂れ流している。実に無惨な骸だった。

「何だろうな、あれは」

「フランスの奴等か？」

「いや、肌が黒いからスペイン人じゃないのか？」

「じゃあゲリラか？」

こんな声が兵達から聞こえてきた。そしてだ。

「酷いものだな」

「ああ、ここまでするか」

「フランスの奴等もいかれてるんじゃないのか？」

「どうなってるんだ、ここは」

「何と……」

そしてだった。馬上でその骸を見たオーグルもだ。顔を顰めさせずにはいられなかった。

「これがこの国の戦いなのか」

「そうだ」

その彼にだ。厳しい顔の中年の男が声をかけてきた。

「それがこのスペインだ」

「アーカス中佐」

「オーグル少尉」

そのアーカスが彼に声をかけてきたのだ。無論彼も馬上にいる。

第三章

「嫌に思っているな」

「はい」

オーグルは実際に顔にそれを出して述べた。

「否定しません」

「そうだな。それはわかる」

「戦争では人が死にます」

あえてだった。当然のことを述べるオーグルだった。

「それはわかっています」

「そうだな」

「しかし。それでもです」

「こうした場所で。こうして人が死ぬのはか」

「納得できません」

そうだとだ。彼は言うのだった。その無惨な骸を見ながらだ。

「それもこうした事態になるとは」

「私もだ」

そしてだった。アーカスもまた辛い声を出すのだった。

「私もこうした状況はだ。見たくない」

「中佐もまた」

「戦場で人が死ぬのならともかくだ」

オーグルと同じ言葉だった。彼も言うのだった。

「こうしたことはな」

「フランス軍も。そしてゲリラ達もですね」

「お互いにこうして殺し合っている」

「これは戦争ではありません」

オーグルは言った。苦さをこのうえなく出しながら。

「何と言うべきか。私にはわかりません」

「いや、戦争だ」

しかしだった。アーカスはそのオーグルにこう話した。

「これもまた戦争なのだ」

「戦争だというのですか、これが」

「武器を手にしてお互いに殺し合っている」

シンプルな言葉だった。しかしそれはまさにその通りだった。真実そのものだった。

「それを戦争と言わずして何という」

「ですが」

「それにだ」

アーカスはここではオーグルの言葉を遮ってだ。自分の言葉を出した。

「このゲリラによりだ」

「ゲリラにより」

「そうだ、フランス軍がゲリラに襲われる」

まずはそこからなのだった。

「それを受けてフランス軍はゲリラを攻撃し殺戮していく」

「ゲリラでない者まで」

「それがいいのだ。そうすればスペイン人はフランス軍を憎むな」

「そしてゲリラがさらに増えます」

「その増えたゲリラがフランス軍をさらに攻撃する」

循環だった。まさにそれだった。

「そしてフランス軍は報復を行いそれがまた」

「遂にはなのですね」

「フランス軍をスペインより追い出すことになるのだ。戦略としては最高のものだ」

「ですがそれは」

オーグルの言葉が苦いものになる。それを自覚したうえで言葉だった。

「あまりにも痛ましい事態が。実際にこうして」

「しかしフランス軍を確実に痛めつけ追い詰めている」

アーカスはここでもオーグルの言葉を遮って己の言葉を告げた。

「それは事実だ」

「フランス軍をですか」

「既に二十万のフランス軍がスペインにいる」

ナポレオンはそれだけの大軍を送り込んだのだ。そうしてそのうえでスペインを何とか平定し己のものとしようとしているのである。

「だがその二十万のフランス軍がだ」

「追い詰められている」

「だからいいのだ。フランス軍を戦場で破るのは困難だ」

実際にイギリス軍もフランス軍に対しては戦場ではまともに勝ててはいなかった。ナポレオンの水際立った戦術指揮だけでなく、フランス軍自体も精強だったからだ。

「だが。こうすればだ」

「勝てますか」

「戦局は我々に傾いてきている」

これもその通りだった。フランス軍はスペインの至るところで憎まれ攻撃されている。その消耗を激しくさせていたのである。

それを見てだ。アーカスは言うのだった。

「このまま進めていけばいいのだ」

「フランス軍もゲリラ達もこうしたことを繰り返してもですか」

「そこに本来のスペイン軍も入るな」

彼等もだというのだ。一応ナポレオンの下になっている。

「彼等も次第に我々の方に来ているな」

「だからこそ効果があるというのですね」

「我々は勝てるのだ」

言い切った。まさにといった口調で。

「これでナポレオンにだ」

「あの男に」

「ナポレオンに敗れたいか」

オーグルの戸惑う目を見て問う。

第四章

「それはいいか」

「いえ、それは」

「そうだな。破りたいな」

「何としても」

「そういうことだ。こうするしかない」

アーカスも苦いものを噛み締めてだ。言うのであった。

「フランスに勝つ為にはな」

「そうですね」

「犠牲がどれだけ大きく酷くなるうとも」

アーカスは言った。苦い声で。

「こうするしかないのだ」

「では我々は」

「これまで通りゲリラ達に武器と燃料を渡す」

決定事項だった。覆すことなぞ考えられないものだった。

「わかったな」

「わかりました」

「それと同時に我々も戦うがな」

こう話してだった。彼等はゲリラ達に武器と弾薬を渡し続けた。

戦闘を続けながら。

このゲリラ戦術によりフランス軍はさらに追い詰められた。遂にはどうしようもなくなった。これは確かにかかなりの効果があった。

フランスはこのことで消耗しやがてロシアで無惨な敗北を遂げ遂にはナポレオンは失脚した。フランスは敗れイギリスは勝った。しかしだった。

ワートルローの戦いにも勝ち勝利に沸き返るイギリスの中でだ。

アーカスは浮かぬ顔でだ。一人酒を飲んでいたのであった。

そうしてだ。その彼のところにだ。アーカスが来たのだった。そ

のうえで彼に言ってきたのである。

「どういた、暗いな」

「ええ、まあ」

「イギリスは勝ち卿も昇進したのにか」

「それでもですね」

その浮かない顔で述べる彼だった。

「この勝利は」

「苦いか」

「ワートルローはいいですよ」

「見事な勝利だったな」

「ですが」

オーグルはだ。浮かない顔で話す。

「その為にです」

「スペインのことが」

「多くの血が流れました」

そのことは忘れられなかった。決してだった。

「しかも惨たらしくです」

「そのことだな。しかしだ」

「しかしですか」

「イギリスは勝った」

アーカムが言うのはこのことだった。それを言うのだった。

「それは事実だ」

「ではあの人達は」

オーグルは難しい顔でだ。また言った。

「犠牲ですか」

「そうなるな。彼等は犠牲だ」

「イギリスの勝利の為に。スペイン人達が」

「スペインも勝利した」

アーカムはオーグルの横に来た。そのうえで彼も酒を頼んでだ。それを前にしてまたオーグルに対して自分の言葉を出すのだった。

「フランス軍が退いたことよってな」

「そのフランス軍がですね」

「我々はその勝利の手助けをしたのは」

「詭弁ですか」

「詭弁ではない」

「アーカムはそのことは否定した。」

「事実だ」

「そう言えるのですね」

「言える。一面において事実だ」

「それと共にだった。彼はこうも言った。」

「しかし君の言葉もだ」

「詭弁というそれですか」

「それもまた事実だ」

「このことも認めるのだった。」

「スペインでは実際に多くの血が流れたのだからな」

「ですから私は。とても」

「気持ちはわかる。私も同じだ」

「大佐もですか」

「そうだ。嫌なものだな」

彼は酒を飲んでいなかった。自分の前に置かれたそれを見たままだ。オーグルにこう言ったのだった。冷たく硬くなった声でだ。

「勝利の裏では何があったのかを知るといふことはな」

「全くですね」

「イギリスは勝ちスペインはフランスを追い出した」

「このことは事実だった。紛れもなくだ。」

「だが。その為になんかあったか、何をしなければならなかったか」

「知っている」と

「勝利も祝えないな」

「そうですね、本当に」

二人で話すのだった。彼等は勝利の美酒は飲めなかった。とても

だ。

スペインでのことはゴヤが絵に残している。グロテスクであり醜悪でもある一連の絵はどれも正視に耐えないものがある。だがそれは紛れもなく現実を描いたものである。それは間違いない。

そしてこの戦争だけではなくだ。これ以降ゲリラ戦というものが度々起こるようになった。それによって得られた勝利は確かに多い。だがそれ以上に犠牲が出てしまっている。惨たらしい悲劇も頻発している。それもまた現実だ。それが何時終わるのかは誰も知らないしわからない。絵に残したゴヤやオーグル達は今も行われているそれを見てどう思つかもだ。それも同じことである。

ゲリラ 完

2010・11・30

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6031q/>

ゲリラ

2011年2月2日23時21分発行